



Woman of YAMAGATA

これからの 「仕事」の 話をしよう



令和3年度 山形大学 基盤共通教育の授業

「キャリア形成とワークライフバランス(山形から考える)」探究ノート

《 講義内容 》

- | | | |
|-----------------------------|--------|------------------------|
| 01 “楽しむ”ことで生まれるバランス | 草苺 早苗 | 山形市男女共同参画センター所長 |
| 02 禍福はあざなえる縄のごとし | 菅藤 健一 | 学術研究院教授(地域教育文化学部担当) |
| 03 慌ただしさの中で楽しむ 仕事・育児・暮らし・人生 | 赤間 由美 | 学術研究院助教(医学部看護学科担当) |
| 04 キャリアとは「生き方」を考えること | 小倉 泰憲 | 学術研究院教授(理学部担当) |
| 05 2拠点居住という選択 | 濱 定史 | 学術研究院助教(理工学研究科担当) |
| 06 「好きなこと」を生かしていくために | 渡辺 絵理子 | 学術研究院准教授(学士課程基盤教育機構担当) |
| 07 ライフを重視した働き方 | 西岡 正樹 | 学術研究院教授(人文社会科学部担当) |
| 08 異国の地で働く | 陳 奥飛 | 学術研究院助教(農学部担当) |



“楽しむ”ことで生まれるバランス

10月20日(水) 14:40~16:10

講師

草薙 早苗

山形市男女共同参画センター所長

Profile

50歳代
山形県出身

山形市役所1988年採用。まるごと推進課長、地籍調査室長を経て2018年度より現職(次長兼所長)。「いきいき山形男女共同参画プラン」に基づき、取組を進める。家族は義母と専業主夫の夫、高校生の息子。

●就職した動機と仕事の内容

結婚後も勤務できる職場として公務員を希望し山形市役所に就職。林務課-教育委員会学校教育課-環境課-教育委員会管理課-まるごと推進課-地籍調査室-男女共同参画センターと異動により様々な行政を経験。現在は、「男女共同参画のまち山形」を目指して新しい男女共同参画計画を策定中。

●これまでの道のり

生まれも育ちも山形市。山形大学農学部で林学を専攻し、1988年に女性初林業技師として就職。平成2年には山形県で初の女性森林インストラクターとして野外活動などの指導にあたる。その後、内部異動で教育業務や環境保護活動、人事労務管理やイベント運営など多様な業務を経験し、行政の業務は幅広く、転職したくらいに多くの経験ができることを実感。

●ワーク・ライフ・バランス

結婚すると女性だけが大変だと思い結婚願望は無かった。ただ出産願望だけはあったので35歳で結婚し40歳で出産。現在高校生の息子が一人。「人生楽しだもん勝ち」がモットーで、趣味も仕事も子育ても何でも楽しめば、自ずとワークライフバランスになると思う。

●夢や目標

男女共同参画という言葉が無くなり、男性も女性も多様な性の人たちも、性別に関わりなく個性と能力が十分に発揮できいきいきと暮らすことができるまち山形市になること。

●学生へのアドバイス

勉強でも仕事でも、どうせやらなきゃいけないんだったら楽しくやった方が良く決まってる。どうやったら自分が楽しく取り組めるかを考えること。アイデア・アレンジ・アイデンティティ(自分の考え、自分流のやり方、自分の個性)を大事にし、興味あることに挑戦してほしい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

相手の立場に立って、自分だったらどう感じるか。男女ともにその共感力があれば男女共同参画社会は実現すると思う。



① どのように工夫して仕事や子育てを楽しんだか。

A 大変な事ばかりに目を向けてしまうと嫌になってしまうので、楽しいことに目を向けるようにする。例えば、仕事が大変であっても職場の人と笑い話などをして良好なコミュニケーションが取れると楽しいと感じることが出来る。

講義の振り返り

📖 失敗を恐れて挑戦する前に諦めてしまうことがあるので、少しでも興味があることがあったら失敗しても経験値になるのだから無駄にならないというお話を思い出し、積極的に挑戦したいと思った。ワークライフバランスとは自分が楽しめる生活のバランスであるという考え方に感銘を受けた。

📖 どんなことでも一生懸命に楽しんで取り組めば、きっと人生が明るくなるということを感じた。山形県の取り組みについてよく知らずに、田舎だから、という理由で就職にいいイメージを持っていなかったが、市や県がより良い社会を作るために工夫をしていることが感じられたので、よく調べて考えようと思った。

📖 一番心に響いたのは自分のやりたいと思ったことはどんなことでもまずやってみるという言葉だった。失敗してもまた別のことをすれば良いし、自分にとっての向き不向きを知ることができるので、消極的にならずに様々なことに挑戦したいという気持ちが芽生えた。

📖 大学でいろいろ経験していくのは大事だと思った。適性がないとわかってもいいからやってみるという話を聞き、ダメそうだからしない私とはまるで違ったので試してみようと思った。

禍福はあざなえる縄のごとし

10月27日(水) 14:40~16:10

講師

菅藤 健一

学術研究院教授(地域教育文化学部担当)

Profile

60歳代
福島県出身

専門は犯罪心理学・臨床心理学。東北地方の少年鑑別所を中心に国家公務員として勤務する。仕事をしながら学位を取得する(博士 教育学)。法務省を定年退職後、2018年4月山形大学に採用される。

●就職した動機と仕事の内容

法務省矯正局の監督に係る盛岡少年鑑別所に就職した。実務をやりながら研究もできるという思いから就職した。非行少年の鑑別、面接・心理検査などを通じて非行の原因を探り、改善のための手立てを考える仕事である。

●これまでの道のり

中高校時代は方向が定まらなかった。大学時代もひょんなことから入学した教育学部で教育心理学を学んだ。大学院入試に失敗し、方向転換して、当時募集していた少年鑑別所に応募した。広範囲の転勤を経験したが、苦労もそれなりにあったものの豊富な経験が人生の楽しみを増してくれたと思う。

●ワーク・ライフ・バランス

働き方改革などといわれるが、官庁のトップである霞が関では深夜までの勤務は常態化していることであろう。当職が現役のときは現在とは全く違って非行少年数が増加の一途であり、多忙を極めており仕事を家に持ち込むことをせざるを得なかった。心のバランスを崩して、初めて仕事と家庭以外の第三の空間を確保すること、生き方の方針を変えることを指導された。が、完璧でなくてもいいと思うようにし、仕事にもプライベートにも帳尻さえ合えばいいと思うように心掛けた。

●夢や目標

批判されることを予想して申し上げるが、私は男性は男性らしく、女性は女性らしく生きることができるそんな世の中が良いと思っている。しかし、他方、LGBTなど多様性が尊重される世の中でもある。その違いをどう考えるか、それが極めて難しい問題だと思ふ。

●学生へのアドバイス

自らが問題意識をもって文献を調べ、仲間と討論してほしいと思う。教員からの一方的な講義だけでは考えが深まらないと思う。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

男女共同参画社会とは、男女それぞれが持つ特徴を否定されずそれぞれの良さを認め合うこと。決して男女が同じようになる・同じようにすることではないと思う。



Q 仕事のやりがいは何か？

A 少年鑑別所に勤務していた時の話。少年たちの悩みや相談を聞いた時に、「先生と話せてよかった」や「心が軽くなった」など多くの少年から感謝された。その時に少年たちの役に立てたことを実感でき、やりがいを感じた。

講義の振り返り

将来ワークライフバランスが取れなくなってしまうようになった時は仕事と家庭以外の第三の空間を確保するというのを思い出して生活しようと思った。

男女の前に人間の個としての存在で認める、という考え方だったが、男性らしい、女性らしい在り方という考え方もあるのだなと感じた。

「辞めなければ何か結果は出るから進み続けるように」という話を聞いて、自分も一度止まったら復帰するのに時間がかかっていたので無駄な時間を生まないためにも進み続けようと思った。

今回の講義を通して、男女共同参画社会の考えが少し変わった。無理をして男女が同じ方向を向く必要はないと思うようになった。互いに互いの特性を見極め、性別関係なしに活躍できる社会を目指したいと思った。

犯罪心理学に携わる方のお話を聞いたことは貴重な経験となった。人の境遇から犯罪につながる行動が生まれるのではなどと推測するのは非常に面白かった。

男女平等とはどのような状態であるのか、今行われているような男女平等に向けての取り組みは本当に正しいものなのか、色々な意味で疑問が湧いた。

慌ただしさの中で楽しむ 仕事・育児・暮らし・人生

11月10日(水) 14:40~16:10

講師 赤間 由美

学術研究院助教(医学部看護学科担当)

Profile

40歳代
宮城県出身

公衆衛生看護学を担当。特に生活保護ケースワーカーのメンタルヘルス支援をテーマとした研究を行う。市町村保健師を経て大学教員となり、2015年より現職。家族は夫と子ども(1歳)。

●就職した動機と仕事の内容

卒業後は市役所で保健師として市民の方の健康を支援する仕事をしていた。赤ちゃんの健診をしたり、健康教室をしたり、障害者の方の生活の支援などをする仕事。その後大学教員になり、今は保健師養成の教育に携わり、講義や実習指導などを行っている。

●これまでの道のり

中高生時代はあまり目立たず、真面目に過ごしていたと思う。恩師の後押しもあり具体的に看護の仕事を考え、山形大学看護学科に進学した。大学時代は、多くの人との出会いや看護の勉強ができ、社会に出てからは、保健師の仕事を通していろいろな人の人生に触れたことや、人を支える専門職や住民の方の熱意も感じ、多くの方々と力を合わせて仕事をする楽しさも感じていた。その後、大学院に進学して働きながら勉強した。また、健康づくりを支援するNPO法人設立に携わって活動している。

●ワーク・ライフ・バランス

子どもができてからは、仕事の時間が限られ、ワークライフバランスをとるのにとっても悩んでいる。近所の公園で遊んだり、些細な日常の中で新鮮な発見がある。子どもがいると近所の方や知らない人でも声をかけて下さり、「子育てするなら山形県」のキャッチフレーズどおり皆さんに温かく見守られて子育てできているのは有難い。

●夢や目標

自分のしてきた健康を支援するという仕事やNPO活動をベースに町の人たちが笑顔になるような活動を1つでも具体化できたらなーと思う。

●学生へのアドバイス

素敵な人と出会うことは「生きてて良かった」と思う場面の1つです。人との出会いが容易でない昨今の環境はあるが、年齢や性別、地域を超えて人との出会いを大切に、出会いや体験を通して自分を大きくしてほしい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

子育てでは、まだまだ女性が大変な思いをすることが多いなーと感じる。皆さんの体験談をどんどん発信して柔軟で現実的な施策や雰囲気づくりができるといいと思います。



① 人生に影響を与えた方や
出会いはあるか。

A 多くの人と協力して何かを成し遂げていく中で、地域の中で知っている人が増えていく。一つのドアを開くと新たに知りたくなる。

講義の振り返り

📖 子育て結婚は男女共同参画に深く繋がっていると気づいた。「男性は女性の子育てのサポートをする」という考えになっている。男が外、女が中という考えが抜けきれてないことと表れである。固定概念をいい意味で壊していきたい。

📖 働きながら学ぶ姿勢は本来、生涯勉強であった昔の人たちのような理想的な生き方だなど思った。モットーやれることはすべてやる、どうせやるなら楽しく気分よく過ごすというのは難しいけれど自分は悲観的になったりすることが多々あるので見習っていききたいと思った。

📖 仕事もプライベートも大切なので、それぞれの時間の質を上げることが重要であるという話に納得した。働きながら学ぶということに関して、何気なく始めたことでも、おのずと自分の財産になるということがわかった。色々なことに挑戦し、自分の力を伸ばしていきたい。

📖 子育てが女性の向いているからといって男性は何もしなくて良いわけではない。自分も子育てしているという考えを持って、サポートしていくというのが、今目指している社会なのではないのかなと私は思った。

キャリアとは「生き方」を考えること

11月24日(水) 14:40~16:10

講師

小倉 泰憲

学術研究院教授(理学部担当)

Profile

60歳代
岩手県出身

主担当は理学部。1・2年のうちのどこかでつまづくとその後の就職活動で壁にぶつかることが多い。そこで入学した時点からつまづかないよう予防教育としてキャリア教育を行っている。それでも問題に遭遇する場合もあるため、対応する教員や職員に対する支援もしている。こうして理学部全体として組織的にキャリア支援を実践している。

●これまでの道のり

秋田大学で電子工学を学び、その後、東北大学大学院で修士・博士の5年間、音響工学を学んだ。28歳で民間企業(警備業)の研究所で技術者として働き始めた。また、NPOでキャリア開発の普及活動を実践。さらに働きながら筑波大学社会人大学院で心理学を学ぶとともに、個人と組織の共生に関する研究を行い、ワークライフバランスの知見を深めた。その後、山形大学理学部のキャリア教員に就任し、現在に至る。

●ワーク・ライフ・バランス

仕事はワークとジョブの2つに分けることができる。ジョブは会社で働いて給料をもらう仕事の事。ワークはジョブを含む広いもので、ボランティアや家事のように給料をもらわないものも含まれる。講義では自分とパートナーの生き方、働き方、学び方を一例として紹介した。夫婦共に方向転換や転職の連続であったが、これらに意欲的に取り組めたのは、何事にも好奇心を持ってたからだと考えている。

●学生へのアドバイス

事前に学生から出された質問を見た時、ユングのタイプ論という性格論を用いると分かりやすいと思った。タイプ論は心にも利き手があるという考え方である。利き手の種類は3つで、「感覚」と「直観」、「思考」と「感情」、「外向」と「内向」である。学生の質問は自分の利き手を使って質問したものが多かったが、その際、まずは自分の利き手を知ることが大切になることを示した。このほか、キャリアの面で重要なのは人生100年時代の考え方である。学生の多くは100年以上生きることを想定することが必要になる。

●相談を受けるとき

相談を受ける際に注意していることについて3つある。「カウンセリング関係のことなのかそうでないのかの区別」と「最後まで話を聞くこと」と「興味本位の質問をしない」ことである。興味本位の質問をすることによって本来の意図を逸したり、相手の聞かれたいことに足を踏み込んでしまう可能性がある。



① キャリアについて学ぶことは？

A メリットの有無では判断できない。キャリアについて学ぶのはメリットがあるからではなく、自分で自分の人生を決めていくために学ぶのである。

講義の振り返り

自分はどのような人なのかを知ることの大切さを感じた。質問をする際には質問をする立場だけではなくされる側の視点に立ち、答えたいような質問をしようと思った。

先生は環境の変化でも好奇心が大きく不安がほとんどなかったというお話を聞いて、自分も不安を無くせるくらい内的キャリアを見つめ、本当にやりたいことを見つげたいと思った。

キャリア形成とワークライフバランスに対する考え方を教わった。心理学を学びカウンセリングをしてきた経験に基づく質問の仕方や質についても教わり、とても自分の生活に活かせる知識が身についたと感じた。

自分もこれからの人生を「いかに生きるか」に視点を当てて、自分のワークライフバランスを考えてみたい。

自分がやりたいと思うこと、やらなきゃいけないと思う仕事がこれだとわかる、変わるきっかけは自分の人生、キャリアの中で見つかるのだと思いました。

2拠点居住という選択

12月1日(水) 14:40~16:10

講師 濱 定史

学術研究院助教(理工学研究科担当)

Profile

40歳代
茨城県出身

専門は木造建築構法、改修再生設計。伝統的な木造建築について、研究および設計活動を行う。山形と東京の2拠点居住。妻と娘は東京で暮らす。

●就職した動機と仕事の内容

もともとのものを作ることが好きだったので、建築設計事務所でのデザインの仕事をした。ものを実際に作ること(設計・デザイン)だけでなく、それらの原理や仕組み(研究)を知ることの魅力を感じて研究・大学教員の仕事につくところになった。伝統的な木造建築のしくみを対象として、滞在しながらおこなう研究スタイル。

●これまでの道のり

大学卒業後に地元茨城の大学の修士課程に進学。その後は茨城の設計事務所働きながら、博士課程に進学。学位取得後は、東京の大学で7年間研究教育を行った後に山形大学に赴任。

●ワーク・ライフ・バランス

山形に赴任が決まったことと、子供ができたことがほぼ同時だったため、生活の方法はよく考えた。妻も同じ建築の大学教員なのでお互いのキャリアを考えて平日は山形で週末は東京の2拠点居住を選択した。朝食・夕食時には、テレビ電話で食事をとるようにしている。また毎週末東京に往復すると、交通費がかかるが考えないようにしている。山形での生活はほとんど大学にいたので、大学以外のワーク＝ライフとなっていて、もっと地域社会に参加せねばと考えている。

●夢や目標

地域社会に貢献できる建築家・設計者・デザイナーを育てて、協働したい。

●学生へのアドバイス

学生時代に考えていたことや行動は、もちろん技術が不足していたり稚拙だったりするが、考えは本質的だったりするのではないかと考えている。日々忙しくなると忘れてしまいがちだが、結果がすぐに出なくても、たくさん考え続けてほしいと思っている。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

様々な方々の意見や行動により世の中の雰囲気が変わってきたような気がするが、まだまだ問題がある。現に自身の家庭でも子育てに関しては妻の負担が大きくバランスが悪い。



① 二地域居住を選んだ理由

A 夫婦それぞれのキャリアを大事に考えていて、どちらかを犠牲にするという考えはなかった。



講義の振り返り

📖 単身赴任ではなく二拠点居住という考え方に馴染みがなかったので新鮮だった。遠く離れた家族ともオンラインで話せるシステムがあり、新しいものも活用しながら家族との関係を保つこともできるということを今回学んだ。

📖 ポジティブな面を考えるという考え方はつらい状況の時にとっても役に立つ思考方法に思えた。

📖 仕事をほぼ趣味と考え楽しむ姿勢や、家族と離れて暮らしていても最大限家族とつながる時間をつくらうとする姿勢が、とてもすてきだなと感じた。家庭と仕事のバランスが取れていて憧れました。

📖 先生のようにやりがいもあって楽しくできる仕事を見つけないか。家族も大切にして、仕事もやりたいことをしている大人になりたいと思った。

📖 スライドの写真から、木造建築のあたたかみを感じられた。大学の勉強のほかに、積極的に自分の興味がそそられる心理に関するイベントなどを探してみようと思った。



「好きなこと」を生かしていくために

12月8日(水) 14:40~16:10

講師

渡辺 絵理子

学術研究院准教授(学士課程基盤教育機構担当)

Profile

50歳代
長野県出身

専門は細胞生物学、発生学。ゲノム編集技術を用いて両生類の受精機構を調べ、様々な受精様式がどのように確立されてきたのかについて研究を行なっている。任期付研究員や民間企業を経て2011より現職。

●就職した動機と仕事の内容

教育、研究ともに生命科学系に関係する仕事についてきた。現在は基盤教育の生命科学の講義、ゲノム編集技術を用いた両生類の生殖機構についての研究を行なっている。

●これまでの道のり

中高生時代から生命科学が好きで、大学は発生学の研究室に進んだ。理学的な基礎研究が専門のため応用的な分野には興味はなかったが、企業での応用的な研究を経験したことが、現在行なっている「多様なバックグラウンドを持つ人に生命科学を教える」際に役立っていると思う。

●ワーク・ライフ・バランス

「研究をしたい女性は結婚してはいけない」と教授が堂々と発言し、学生側もなんとなく納得してしまうような大学時代だった。かなり時代は変わったが、皆がまだまだ自分の中にもある「なんとなく」の思い込みを見直していく必要があると思う。

●夢や目標

新型コロナウイルス感染症により社会が大きな影響を受けている現在、生命科学を専門としない人、特に興味がない人たちにも最低限必要な生命科学の知識を普及させる手助けができればと考えている。

●学生へのアドバイス

キャリアについてあらかじめ考えていくことはもちろん大切だが、思い描いたようにはことが進まないこともある。たとえ計画通りにならないことがあっても、本意ではない経験も役に立つと考えることも一つだと思う。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

近年よく言われることだが、男女共同参画社会の実現とは単に女性を助けるものではなく、(少なくともこれから社会を作っていく若い)男性も生きやすい社会を目指しているものであると考える。



Q 面白いと感じることは何ですか

A そもそも基礎研究とはすぐに役に立つことではないが、まだわからないことを明らかにするための研究で、専門的過ぎてウケないが、本人は面白いと感じている。そういう感覚を大切に。

講義の振り返り

📖 生命科学に関する知識欲がひしひしと伝わってきた。自分の好きなことを極める方向でキャリア形成を考えた方が、ワークライフバランスの維持の面からも効果的だということが分かったが、そうした中でも、興味のないことや魅力的でないことも自分の見識を広げる上では重要だと知った。

📖 自分の志望する分野に近い生命科学に関する話だったので、自分のキャリアを考えるうえで参考になる部分が多かった。改めて今のうちに幅広い分野の知識を身に付けておかなければと自分の気を引き締めるきっかけとなった。

📖 自分が興味のあるもの、面白いと感じるものだけを学んでも、自分を大きく成長させることはできないと思った。社会からの評価も必ず存在するので、そういう意味でも興味の無いことに対しても努力しなければならないと考えた。

📖 思い描いたように進まなくとも本意ではない経験も役に立つと考えることは大事だと思った。自分がやっていることが本当にやりたいことなのかそれともやらされているのかもじっくり考えるべきだと思った。

📖 当たり前のことがもしかしたら他の人を傷つけてしまっているかもしれないと思うので、常に他人の立場に立って行動していきたいと思った。

ライフを重視した働き方

12月15日(水) 14:40~16:10

講師

西岡 正樹

学術研究院教授(人文社会科学部担当)

Profile

40歳代
徳島県出身

専門は刑法。東北大学大学院法学研究科博士後期課程修了後、同大学院助教を経て、2010年4月に山形大学に赴任。現在は、妻と娘(5歳)との3人暮らし「休日には可能な限り娘と遊ぶ」をモットーとしている。

●就職した動機と仕事の内容

大学3年の後期に将来研究者となるべく大学院への進学を決意し、大学院修了後、修了大学院の助教を経て、刑法の専任講師を募集していた山形大学に応募し採用された。現在は、山形大学人文社会科学部教授として教育、研究、学内行政、学外業務等に携わっている。

●これまでの道のり

田舎の出身で、穏やかな中高生時代を過ごした。大学時代はアルバイトに勤しんだ日々であった。大学院進学後本格的に研究を開始し、助教時代を含め、(寝る以外は)一日の大半を研究室で過ごした。山大就職後に結婚し、現在は妻と5歳の娘との3人で生活している。

●ワーク・ライフ・バランス

自分のやりたい事を「ワーク」としているので、ワークに関する不満は(ほとんど)なく、教育と研究に携われる喜びが大きい。「ライフ」に関しては、コロナ禍で活動が制限されているが、制限された中で工夫をして家族で楽しく過ごせている(と自分では思っている)。

●夢や目標

目標は、引き続き教育と研究に精進し、社会で活躍できる人材の輩出と注目される研究成果を発表すること。夢は、研究以外で生涯携わることのできる分野を持ち、その分野の特技を身に付け、技を極めること。

●学生へのアドバイス

大学時代は今後の人生についてじっくり考えることのできる貴重な時期。(私も学生時代は悩み、考え、また悩み、考えるの連続だった)。「ライフワークバランス」(出口治明さんの言葉)を念頭に、現在の自分にとって何が一番大切か、またどのような人生設計を構想するかをよく考えながら今後の進路を模索してほしい。

●「山形の女性の働き方」から男女共同参画社会を考える

男女共同参画社会の前提である「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され」(男女共同参画社会基本法第2条)ることが当たり前にするための意識改革が、性別・年代を問わずに必要なと考えている。



① 勉強やアルバイト以外にやるべきこと

A 友達をつくること 社会人になってからは損得勘定が入る(西村博之さんの言葉)

講義の振り返り

📖 本を読んだり年上の人と接して話したりすること、友達を作ること、興味のあることに没頭して勉強することなど、大学生のうちにやっておくべきことについてとても勉強になった。

📖 自分のやりたいことを仕事にしていることで、仕事のモチベーションは「やりたいことをやる」と聞き、自分の仕事に対するイメージが変わった。私も何かに熱中できるものを探してそれを仕事にしていきたい。

📖 今は自分の生活しかないのでアルバイトや部活、趣味などすべて自分で使える時間ばかりですが、時間の大切さを受験で知ったにもかかわらずうまく時間を使えていないと感じているので、何もしないのではなく自分のやりたいことを積極的に行える自分を目指して頑張ります。

📖 最も印象に残った言葉は、大学生活の中で、友達を作ったほうがいいという言葉で、これからの大学生活で多くの人と関わって、友達を作っていけるようにしたいと思った。ワークライフバランスではなく、ライフワークバランスのほうが適当だという言葉にとっても納得した。

📖 仕事は換えが効くけど、家族や友人は換えが効かないということにすごく共感した。

異国の地で働く

12月22日(水) 14:40~16:10

講師

陳 奥飛

学術研究院助教(農学部担当)

Profile

20歳代
中国山東省出身

専門は農業経済学、フードシステム論。農産物の取引形態や、農産物生産者や、食品企業、消費者などの意識分析などについて研究している。大学を卒業後、1年間の研究員を経て大学教員に至る。

●就職した動機と仕事の内容

両親が二人とも高校の先生なので、小さい頃から漠然と将来自分も教員になりたいと思っていた。大学院に進学して研究の面白さに気づき、アカデミックの世界で働きたい気持ちを固めた。仕事は、授業・研究が主な内容。

●これまでの道のり

大学時代までは中国で過ごしていた。専門は日本語で、日本語を学んでいくうちに、中国で日本語を学ぶのは物足りないと感じ、日本へ留学することを決めた。ご縁あって山形大学大学院農学研究科にて修士を取得、さらに博士学位を取得した後、愛知大学で1年間研究員を経て、母校の山形大学へ助教として採用され、今に至る。

●ワーク・ライフ・バランス

現在はまだ結婚しておらず、今の職に就いて2年目で、まだ慣れていないところがたくさんあるので、主にワークに傾いている。まだ少し先のことが、家庭や子供ができるようになったら、出産後の働き方や育児について不安を感じている。例えば、子供の母語教育等…また、中国にいる両親が、今後高齢になったらどうするか悩んでいる。

●夢や目標

仕事面ではまだまだ半人前なので、しっかり研究成果を出しつつ、教育指導能力を高め早く戦力になりたい。生活面では、コロナ禍で渡航が制限されている今、なかなか両親のそばで親孝行できない。毎週テレビ電話しているが、早く両親と対面で会える日を願っている。

●学生へのアドバイス

人生はあらゆることへの挑戦の連続である。失敗を恐れず、自分にとって居心地の良いところから抜け出して、新しいことに挑戦してみる精神を持ってほしい。



① 育児について日本と中国の違いは

A 中国は両親や祖父母で、日本は主に母親に求められている

講義の振り返り

未来は誰にもわからないから覚悟を決めて行動し、その選択が正解になるように努力することが大事だと分かった。

大学で働くことへ興味があったので、学生生活から研究員・助教としての職に就くまでの流れとそこで考えたことや苦労について詳細まで知ることが出来て大変勉強になった。

中国で日本語を学び、さらに自分の探究心を生かすために日本へ留学するという積極的な行動と強い学習意欲にとっても感心した。将来自分がつきたい仕事を模索しながら、アルバイトと勉強を両立させるバランスを考えることに大事な情報をもらったような気がする。

中国と日本の比較知を知ることができて面白かった。昼寝の習慣やアルバイト経験の有無、図書館の開閉館時間など意外な点が異なっていることが分かった。

今回の講義を聞いてまず外国に行って言語を学ぼうと決意した勇気の素晴らしさを感じた。

山形大学男女共同参画基本計画(第2次)の施行

山形大学は、令和2年4月に第2次山形大学男女共同参画基本計画を施行しました。第2次基本計画では、令和2年度から10年間を計画期間とし、男女共同参画とダイバーシティを一層推進することを目的に、基本方針及び具体的施策を定めています。女性教員比率や女性管理職比率に関するより高い目標を掲げ、「無意識のバイアス」や性的指向・性自認等への配慮なども明記しました。また、ダイバーシティを推進するため、地域や県内外の大学等とネットワークを拡大していきます。初年度は、「多様な性に関するガイドライン」を策定し、研究・仕事と家庭生活の両立支援制度の充実を図りました。



探究学習で学ぶキャリア形成

【授業名】

山形大学 基盤共通教育

「キャリア形成とワーク・ライフ・バランス (山形から考える)」

【授業の目的】

- ①ワークライフバランスについて考え、自分のキャリア・ビジョンを描く。
- ②男女共同参画社会を理解し、課題を考える。
- ③新聞学習で社会人基礎力を身につける。

【授業の計画】

- いろいろな分野のゲスト講師による貴重な講義。
- 講師への事前質問や進行などを学生が担当。
- グループごとに課題探究学習を行う。
- 新聞切抜きレポートに取り組む。
- キャンパス保育所の見学、地域との交流。

【学生の感想】

- ★文系から理系まで、どの先生の講義も興味深く、男女共同参画社会の一員として、将来の職業のことだけでなく、視野を広げたキャリア・ビジョンを持つことができた。
- ☆この授業を選んだ理由は、大学生になっても自分のキャリアを明確にできずにいたからだった。今までの授業の中で一番ためになり、一番楽しく有意義な時間だった。
- ★コロナ禍で一人の時間が増えたが、講義で「人と交流して孤独にならないことの大切さ」がわかった。「今を大切に生きる」という言葉も心に残った。
- ☆新聞レポートで自主的に新聞を読む習慣が身に付き、司会・記録などの役割分担をとおしてコミュニケーション力・協調性が高まった。

男女共同参画とは

「男女共同参画社会基本法」

(平成十一年六月二十三日法律第七十八号)

第一章総則(目的) 第一条

- ・男女の人権の尊重
- ・社会経済情勢の変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現する緊要性
- ・基本理念を定め、並びに国、地方公共団体及び国民の責務
- ・施策の基本となる事項を定めることにより、男女共同参画社会の形成を総合的かつ計画的に推進

山形大学は、「男女共同参画社会基本法」の理念に基づき、男女共同参画のために大学が担うべき役割と責任を自覚し、「山形大学男女共同参画基本計画」(平成22年)を策定し、男女共同参画を推進してきました。令和2年度から第2次基本計画に従って、さらに充実した取組を進めていきます。

性別にかかわらずに、すべての人が個性と能力を發揮できる世の中がダイバーシティ社会です。我が国では男女共同参画基本計画や科学技術基本計画等の下、男女共同参画や教育分野におけるダイバーシティ推進を図っています。山形大学は平成27年度に文部科学省のダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)に採択され、米沢栄養大学、大日本印刷株式会社研究開発センターと連携し、ダイバーシティ研究環境の実現に取り組んできました。

この「キャリア形成とワーク・ライフ・バランス」の授業は、男女共同参画を担う次世代を応援するため、男女共同参画推進室が担当しています。

令和4年3月25日発行

発行 山形大学男女共同参画推進室

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

TEL 023-628-4937

Mail yu-y-danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

編集 准教授 柿崎悦子